

シヤム画『我らの紳士仲間』

司書 佐藤俊子

フランス第2の革命渦中の1830年は、諷刺新聞『ラ・カリカチュール』(La Charicature)の発刊の年である。グラビア印刷が導入される1870年代までのこの40年間には、数多くの諷刺画家たちが活躍し、絵入り新聞が隆盛をきわめた。こうして、パリ人口の半分がほとんど字も読めなかった時代とあって、絵入り新聞は広く読者層を獲得していたのはいうまでもない。

その当時の主要な諷刺画家のひとりに、シヤム(Cham)がいる。本名を、アメデ・シャルル・アンリ・ド・ノエ伯爵(Amédeé-Charles-Henri comte de Noé)といい、1819年1月26日パリで生れ、1879年9月同地で亡くなった。彼の貴族的な姓は、洪水に生き残り、人類の祖となったノア(Noah)のフランス語ノエ(Noé)からきており、彼の雅号シヤム(Cham)はノアの次男、Ham(フランス語 Chamの発音はKam)から選んだ。彼の父、ルイ・ド・ノエ伯爵(Louis comte de Noé)はフランスの大貴族だった。

詳しい出版年は不明であるが、当館には、シヤムによって描かれた20枚の手彩色石版画集、『我らの紳士仲間；ジュネス・ドレの趣味、態度、おしゃれ、品行と楽しみ』(K726.1-N) Noé, Amédée, comte de : *Nos gentils hommes; goût, tournure, élégance, mœurs et plaisirs de la jeunesse dorée*, par Cham. Paris(18-?)がある。

内容は、1794年に反口ベスピエール派に加担した金持の道楽息子たち、ジュネス・ドレの当時の趣味、おしゃれ、品行など、生活態度・意識の伊達男ぶりが諷刺的に描かれている。

“君、恐がることはないよ！”(衿首を馬にくわえられた男)、“獲物なしの賞金めあて”(ライフル銃片手の2人のしゃれ男たち)、“車職工の約束”“ベ

らぼうな抵当”(派手なガウン姿の高利貸し)、“気の毒な借金取り”“親友”(キザなフェンシング友だち)、“おやまあ、なんておしゃれな小犬だ!!”(図2)“夜食の後の男爵様”(酔いつぶれる主人と使用人)、“元貴族”“クレー射撃”(土鳩射ち)、“偏見なんかとつとと消え失せろ!”…の各図はシルクハットを被り、胸元をクラヴァットで飾り、ピンクや薄紫の派手な色合いのチェックやストライプのパンツロンと上着を身につけ、足元にはリボン飾りの靴を履いたステッキ片手のしゃれ男たちが描かれていて、当時の狩猟や乗馬、スポーツや遊びの様子がうかがい知れる。

この画集には、14ページにわたり、出版元 Aubert 社の出版目録が掲載され、出版物、定期刊行物、



図1 標題紙

アルバム類、文様、服装書、肖像画、諷刺画、石版画など項目別に分けてある。

他に当館には、1920年頃、ベルリンのA. R. Meyer社から発行されたシャム画の8枚の単色石版画集『流行の苦痛；石版画』（383. 13-C）Qualen der Mode; Litographienが所蔵されている。

シャムが19世紀の服装を諷刺画として描いた図版のコレクションが数多くあるなかで、ヒラーの服飾文献目録（P.661）に載っている、インド、エジプト、トルコの服装を描いた図版集『1800年にオリエント軍とエジプトでの戦いに出かけるためのベンガル・イギリス領遠征に関する回想録』Mémoires relatifs à l'expédition anglaise partie du Bengale en 1800 pour aller combattre en Egypte l'armée d'Orient. (Paris) l'Imprimerie royale, 1826. をはじめ、リッパーハイデの服飾文献目録には、1830年代から1860年代に描かれたシャムの画集が、『現代の狂気。政治的、社会的諷刺』



Paris: Adam & Charles De la Boverie

PALDAMBLEU QUEL BON PETIT CHIC!!

-Voilà une rosière comme nous les aimons, nous autres gentils-hommes!

図2 おやまあ、なんておしゃれな小犬だ!!

Folies du jour. Carricatures politiques et sociales par Cham. Paris, Au bureau du journal Le Charivari, (1848)のほか、3579番から3611番に載っている。

当時の諷刺ジャーナリズムの指導者といわれた偉大な編集者、シャルル・フィリポン（Charles Philipon, 1806-62）は、2つの重要な諷刺新聞、『ラ・カリカチュール』（1830年11月4日、週刊紙）と『ル・シャリヴァリ』（Le Charivari, 1832年12月1日、日刊紙）を創刊したが、シャムはこの『ル・シャリヴァリ』の中で、フランスとアルジェリアの生活の素描が好評を博し、1843年から死ぬまでの36年間で仕事を続けた。

パントマイムのピエロ役者、ドゥビュロー（Jean-Baptiste Gaspar Debureau, 1796-1846）が演じる、扮装の下に現われる社会の多彩な仕事や商売、とりわけ肉体労働の自然な身振りを数多くの諷刺画家たちが描いたが、シャムもシャルル・フィリポンが編集する『ミュゼ・フィリポン』（Musée Philipon）に彼の演戯する『アフリカでのピエロ』（Pierrot en Afrique）を1842年に載せている。この4幕のパントマイムは同時代の歴史や政治に言及する時局もので、アルジェリア占領後、フランスがアブデル＝ガデルを相手に戦争している時分に上演され、シャムはそのどたばた喜劇風のあり方をよく描写している。

1860年頃、創刊当時から『ル・シャリヴァリ』で仕事を続け、諷刺画家の第一人者だったドーミエ（Honoré Daumier 1808-79）*が解雇されたのは、多彩なイメージを駆使して軽やかな作品を仕上げるシャムという競争相手の出現を見逃がすことはできない。

- *当館所蔵のドーミエの主作品集（洋書のみ）
- ・ Honoré Daumier. (723.35-D)
 - ・ Liberated women; bluestocking and socialist women. (726.1-D)
 - ・ Daumier on war. (734-D)
 - ・ Dans la même collection. (10 Vols.) (734-D)